Perplexity Computer「Multiagent」の深掘り調査と知的財産業務への戦略的活用考察

Gemini 4 Carbon

2026年11月17日（日本時間18日報道のテクノエッジ記事対象）、Perplexityは自律型AIエージェント基盤「Perplexity Computer」および常駐型協働機能「Teammates」において、従来の最上位設定「Ultra」のさらに上に位置づけられる新たな最上位実行レベル「Multiagent」を発表した[1]。本機能の核心は、単に並行稼働するサブエージェント数を最大16体（＋リード役1体）に拡張したことではなく、公式例示構成においてAnthropicの「Claude Fable 5.2」をリード役に据えつつ、「Claude Opus 5.5」「GPT 6.1 Sol」「Gemini 4 Carbon」という開発元の異なる複数のフロンティアモデルを1つのチームに混在させ、エージェント同士が直接やり取りして根拠の共有・前提への疑問呈示・矛盾の洗い出し・共有ファイルの共同編集を行う「異種モデル間ピアツーピア相互検証アーキテクチャ」を実装した点にある[1]。Perplexityが発表時の公式Xスレッドで公開した内部ベンチマーク（Terminal-Bench 4.1およびWANDR）では、同一モデルを4体複製した構成では推論バイアスの同調により単体実行よりスコアが低下する例が見られたのに対し、異種モデル混成チームは全条件で単体および同一モデル4複製を上回り、かつ役割に応じたモデル分散によって最上位モデル4複製よりも1実行あたりの推論コストを抑えられる結果が示されている（ただし第三者機関による独立した再現検証は未実施）[5]。

知的財産（IP）業務への適用において、この「複数文書の並行読解と相互矛盾の検出」「異種モデルによるハルシネーション（幻覚）の相互牽制」という設計は高い親和性を持つ[1]。具体的には、①特許明細書ドラフトにおける請求項・実施例・図面符号間の整合性監査（サポート要件・明確性要件の事前点検）、②無効資料調査やFTO（侵害予防調査）における複数文献を跨いだクレームチャートの共同構築と進歩性論理付けの反証検証、③日米欧中の審査経過（包袋）を横断した中間処理・禁反言リスクの分析、④M&Aデータルームにおける特許ポートフォリオ・ライセンス契約（支配権変更条項等）・事業価値評価の並行照合、⑤特許データと財務・市場データベースを統合したIPランドスケープ（IPL）構築という5領域において、単一モデルのチャットや従来のハブ型エージェントでは見落としが生じやすかった複合タスクの高度化が期待できる[1]。

一方で、知財実務への導入には3つの重大な制約とリスクへの対処が不可欠である。第一に情報管理リスクであり、個人向けの「Perplexity Max」プランは初期設定でAI学習へのデータ利用が有効化されているうえ、外部モデル提供事業者に対するゼロデータ保持（ZDR）保証が付帯しないため、出願前の未公開発明を入力すれば特許法上の新規性喪失や不正競争防止法上の秘密管理性毀損、弁理士の守秘義務違反を招く懸念がある[7]。機密情報を扱う実務ではZDR契約と管理統制を備えた法人向け「Enterprise Max」環境（かつ管理者によるロール上限解放）が実務上の必須条件となるほか、複数の外部モデル事業者（Anthropic・OpenAI・Google Cloud等）へ同時にデータが流通するマルチサブプロセッサ構造への契約的配慮と、ローカル実行版（Portable Computer等）ではMultiagentが動作しない（Webクラウド限定）という仕様理解が求められる[7]。第二に公的特許データベースの規約制約であり、J-PlatPatやEspacenetはプログラム・ロボットによる自動データ収集や大量アクセスを禁止しているため、エージェント群にこれらサイトを直接自動巡回させてはならず、サマリアAgentやPatSnap等の知財特化型AI・商用DBで適法に母集団形成と一次スクリーニングを行ったうえで厳選文献のみを投入する「2段階ファネル運用」が原則となる[14]。第三にクレジット経済性で

あり、重厚なMultiagent実行はPerplexity公表値で1回あたり最大54.50ドル相当（約5,450クレジット）を消費し、月間付与枠を数回で消化し得るため、案件の重要度に応じた厳格な実行レベル管理が求められる[3]。

1. Perplexity Computerと新機能「Multiagent」の技術・アーキテクチャ深掘り

1.1 基盤となるPerplexity ComputerとSPACE実行環境

Multiagentの機能を正確に評価するには、その土台である「Perplexity Computer」が通常のAI検索（Perplexity Ask）とは異なる自律実行基盤である点を押さえる必要がある[21]。2026年2月25日に発表され、同年3月13日にProプラン以上へ拡大展開されたPerplexity Computerは、単なる検索・要約エンジンではなく、与えられた目標を複数ステップの実行計画に分解し、クラウド上のブラウザ操作、サンドボックス内でのコード実行、ならびに数百種類（外部解説記事では400以上とされる）の外部アプリケーションコネクタ（SharePoint、OneDrive、Google Drive、Box、Slack、Gmail、Outlook、GitHub等）との連携を自律的に連鎖させ、完成された調査報告書・Excelモデル・プレゼンテーション資料・Webアプリケーション等の成果物を生成する汎用デジタルワーカーである[21]。ファイル処理仕様も拡張されており、通常のAsk検索が1ファイル最大50MBかつテキスト解析可能な形式に限られるのに対し、Computerのセッション直接添付では1ファイル最大200MBまで対応し、常設ワークスペースであるProjectには1ファイル最大100MB・最大10,000ファイル（合計5GB）まで格納して、コード実行により.zip圧縮アーカイブを展開・読解することも可能となっている[26]。

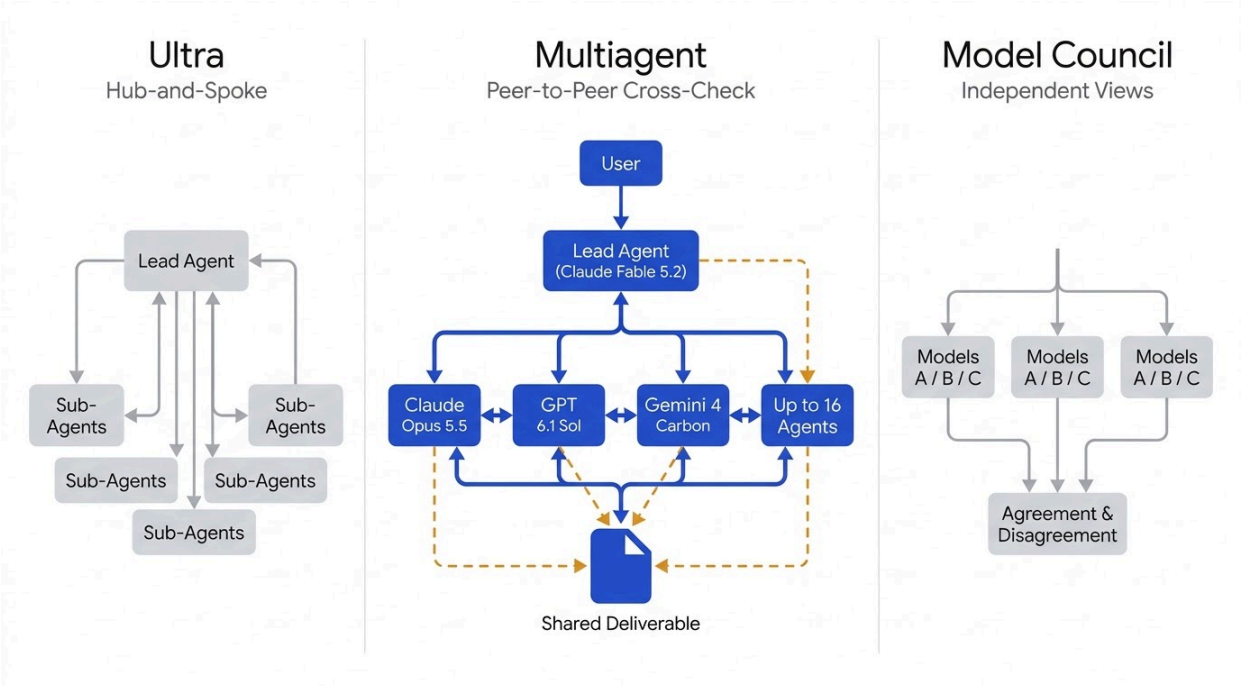
この長時間・多段階のエージェント処理を支えるセキュリティおよびランタイム基盤が、Perplexityが2026年6月に本番展開を開始し、同年10月16日にApache 2.0ライセンスでオープンソース公開したマイクロVMサンドボックス基盤「SPACE（Sandboxed Platform for Agentic Code Execution）」である[27]。SPACEはFirecrackerの最適化カーネルを採用し、各エージェントの実行環境を独立したゲストカーネル付きのハードウェア仮想マシン（VM）として分離することで、サンドボックス生成の中央値レイテンシを従来のコンテナ型ソリューション（185ミリ秒）から60ミリ秒へと3.1倍高速化（90パーセンタイル値では447ミリ秒から89ミリ秒へと5.0倍高速化）している[27]。ストレージ層にはCopy-on-Write（CoW）機能を備えるbtrfsファイルシステムを採用し、VMを一時停止させない高速なディスクスナップショットとチェックポイントからのクロスノード復元・ロールバックを実現している[27]。さらにセキュリティ機構として、外部サービスの認証情報をVM内部に一切保存せずネットワーク層またはブラウザ自動入力で注入する外部クレデンシャルストア、全アウトバウンド通信を制御するネットワークゲートウェイ、ならびに顧客自身の鍵管理サービス（KMS）と連携して鍵失効時に保存データを即座に読解不能にするBYOK（Bring Your Own Key）暗号化アーキテクチャを備えている[27]。

もっとも、デプロイ形態に関しては明確な切り分けが存在する。Perplexityは2026年8月25日にNVIDIA DGX Spark（および同年9月にWindows RTX搭載PCやAMD Ryzen AI Max環境）上でオープンウェイトモデル（Qwen 3.8 27BやPPLX 27B）をクレジット消費ゼロでローカル実行する「Perplexity Portable Computer」を、同年10月20日にはApple Silicon搭載MacのAccessibility APIと統合して完全オンデバイス動作するネイティブmacOS版Computerを相次いで投入している[11]。しかし、今回追加された「Multiagent」を含むEffortモード（労力設定）はmacOS・Windowsのデスクトップアプリやローカル実行環境には対応しておらず、MultiagentはPerplexityのクラウド基盤（Webブラウザ版）限定で稼働する[10]。複数ベンダーのプロプライエタリなフロンティアモデルをクラウド上でリアルタイム協調させる構造上、オンプレミスやオフライン環境でのMultiagent実行は選択できない点が実

務導入の大前提となる[3]。

1.2 Multiagentの協調メカニズム：ハブ型からピアツーピア相互検証網への転換

Perplexityは2026年9月17日にComputer向けの労力制御（Effortコントロール）として「Light」「Standard」「High」「Ultra」の4段階を導入していたが、11月17日発表の「Multiagent」はその最上位に位置づけられる第5の実行レベルである[4]。また、同社は2026年7月から複数モデルが同一の問いに独立して回答する「Model Council」も提供しており、今回のアップデートによってPerplexityはタスクの構造に応じた3種類のマルチモデル活用方式を確立した[4]。



従来の「Ultra」と新設された「Multiagent」は同一のリードモデルを使用するものの、サブエージェント間の情報伝達トポロジーが構造的に異なる[4]。Ultraではリード役がサブタスクを分割して各サブエージェントに委任し、各サブエージェントは自らの担当パートの結果のみをリード役へ返却するため、あるサブエージェントの発見事項が別パートの前提条件を覆す場合でも、最終統合段階まで食い違いが解消されにくい構造にあった[1]。

これに対しMultiagentでは、リード役が実行計画を策定して最大16体のサブエージェントへ作業を割り振り（リード役自身も実作業の一部を担う）、実行中にサブエージェント同士が直接通信する[1]。例えばM&Aのデータルーム調査や業績予測において、顧客契約書を精査していたエージェントが「収益見通しを変動させる条項」を発見した場合、その根拠を他のエージェントが即座に利用したり、前提条件へ疑問を投げかけたり、数値の食い違いを検知して追加調査へ回したりできる[1]。さらに共有ファイルの編集もリアルタイムに連携しており、1つのエージェントが財務モデルの売上前提を更新すると、企業価値評価（バリュエーション）を担当する別のエージェントへ更新後の数値を使うよう直接通知が送られる[1]。

このような裏側のメッシュ型協調にもかかわらず、利用者側の操作窓口は常にリード役1体に一本化されている[1]。利用者は各エージェントへ個別に指示を送る必要はなく、画面上のエージェントパネルで「どのエージェントがどのモデルでどの作業を実行中か」をリアルタイムに監視でき、スレッドを停

止すればチーム全体が一括停止する[1]。回答後に追加の修正依頼（フォローアップ）を行った場合も、リード役が変更の影響を受ける特定のエージェントのみに差分を伝達し、既存の作業文脈を維持したまま効率的に作業を継続させる[1]。

実行モード / 機能	オーケストレーション構造	公式推奨用途・想定タスク例	利用条件・備考
Light	軽量モデルによる定型処理	明確な手順と出力形式が定まった日常業務（例：Gmailから請求書を集約し重複番号を検出）[13]	Web / iOS（v26.38.0+） / Android（v2.100.0+）対応[13]
Standard	標準コーディネータ（2026年11月時点でClaude Opus 5.5とペアリング）による統合	複数情報の要約やブリーフィング資料の作成など日常的な実務全般[13]	Web / iOS / Android 対応[13]
High	深い推論レベルによる要因分析・比較衡量	顧客要望・利用データ・開発工数を比較して優先順位を導くような分析業務[13]	Light/Standardより時間とクレジットを消費[13]
Ultra	1体のリード役がサブエージェントに委任し、各エージェントはリード役にのみ報告（ハブ型）	複数の成長仮定に基づく新規市場評価など、オープンエンドな課題で複数のアプローチを試行する作業[4]	サブエージェント間の直接通信・共同編集はなし[1]
Multiagent	Ultraと同じリード役のもと最大16体の異種モデルが相互に直接通信・相互検証・共有ファイルを共同編集	相互に関連する複数パートを並行処理する大規模業務（M&Aデータルーム検証、年次報告書の整合性監査、複数シナリオ業績予測、複雑な税務申告準備）[1]	**Perplexity Max**契約者向け・**Web**版限定（Enterpriseはロール上限解放要）。クレジット消費最大[4]
Model Council	複数の異なるモデル	同一の論点に対して	2026年7月導入。

	が同一の問いを完全に独立して調査し、一致点と相違点を対比提示	相互影響のない「独立した複数の見解」が欲しい判断業務[1]	WebおよびiOSアプリ対応（Max / Enterprise Max）[10]

1.3 異種フロンティアモデル混成チームの構成と役割分担

Multiagentの最大の特徴は、単一ベンダーのモデル群ではなく、Anthropic・OpenAI・Googleという競合3社の2026年秋世代フロンティアモデルを単一ワークフロー内で協働させている点にある[2]。機械学習におけるアンサンブル手法と同様に、学習バイアスや得意領域の異なるモデル群を組み合わせることで、単一モデルでは見過ごされやすいハルシネーションや論理的飛躍を相互チェックで捕捉する狙いがある[2]。

Perplexityが公式ブログで例示した構成では、全体計画の立案と作業分割を担うリード役にAnthropicの「Claude Fable 5.2」が配置され、実作業を担う標準サブエージェントチームとして「Claude Opus 5.5」「GPT 6.1 Sol」「Gemini 4 Carbon」の3種類が組み合わされる[1]。利用者はクエリ（依頼文）の中で使用したいモデルを明示的に指定することも可能であり、ユーザー指定時や特定の高度なサブタスクが必要とする場合に限り、「Claude Fable 5.2」やOpenAIの「GPT 6 Astra」がサブエージェントとして追加参加する[1]。外部AI評価機関・技術解説メディア（Artificial Analysis関連データ等）が報告する2026年11月時点の各モデル仕様を照合すると、この標準チーム編成が明確な機能補完に基づいていることが確認できる[31]。

モデル名（開発元）	**Multiagent**での位置づけ	リリース時期	コンテキスト長 / 出力規模	**API**参考単価（入力/出力 **100**万トークン）	外部評価で報告されているモデル特性・主要指標
Claude Fable 5.2 （Anthropic）	例示リード役 （指定・必要に応じサブ役も参加）[1]	2026年11月9日[32]	最大100万トークン（評価時平均約27.4万出力トークン）[31]	$8.00 / $40.00[31]	長期エージェント計画と高難度推論に特化[31]。Intelligence Index 64.6、HLE-Diamond 80.2%、Terminal-Bench-Science 0.1で73.3%と最高水準を記録[31]。

Claude Opus 5.5 （Anthropic）	標準サブエージェント[1]	2026年9月[33]	最大100万トークン（評価時平均約17.3万出力トークン）[31]	$4.00 / $20.00[31]	長文読解とビジネス成果物（スライド・報告書・表）作成に強み[31]。AA-Briefcase v1.1で首位（Elo 1,800）を獲得[31]。
Gemini 4 Carbon （Google）	標準サブエージェント[1]	2026年11月上旬[31]	最大100万トークン（評価時平均約12.3万出力トークン）[31]	非公開（100万トークンまで同一価格帯）[31]	事実検索・照合と低ハルシネーションに強み[31]。AA-Omniscienceのハルシネーション率が11.4%と最小で、Terminal-Bench 4.0（65.2%）およびAutomation Bench-AA（77.8%）で首位[31]。
GPT 6.1 Sol （OpenAI）	標準サブエージェント[1]	2026年9月[31]	個別数値非明示（外部比較ではFable 5.2を上回ると報告）[31]	$2.00 / $10.00[31]	高スループットと高いコスト効率を備える実務ベースラインモデル[31]。並列サブタスクの経済的な処理に寄与[5]。
GPT 6	オプションサ	2026年9月	105万トーク	$10.00 /	OpenAIの重

Astra （OpenAI）	ブエージェント（指定・必要時のみ参加）[4]	[31]	ン / 最大出力12.8万トークン[31]	$50.00[31]	量級推論モデル（Agents' Last Exam 73.1%）[31]。トークン単価が高いため必要箇所に限定投入[4]。

すなわち、高度なタスク分解・推論力を持つ「Claude Fable 5.2」が全体設計を担い、事実照合におけるハルシネーション率が最も低い「Gemini 4 Carbon」が根拠の裏付け監査を行い、コスト効率に優れる「GPT 6.1 Sol」が並列調査を回し、文書構造化に長けた「Claude Opus 5.5」が共有成果物をまとめ上げるという役割分担がシステムレベルで設計されている[2]。

1.4 競合マルチエージェント基盤とのポジショニング比較

2025年から2026年にかけて主要AI各社がエージェント製品を相次いで投入したが、競合製品とPerplexity Multiagentを比較すると、「並列規模の拡大（スケール重視）」対「異種モデル間の相互検証の深さ（品質・信頼性重視）」という明確な設計思想の違いが浮かび上がる[10]。

比較項目	**Perplexity Computer Multiagent**	**Kimi Agent Swarm（Moonshot）**	**Manus Wide Research**	**SuperGrok Heavy（xAI）**	大手モデル直系エージェント（**ChatGPT Work / Claude Cowork / Gemini Task**）
最大並列規模	最大16体（＋リード役1体）[10]	最大300体のサブエージェント[10]	「数百規模」（最大250項目で検証）[10]	非公開[10]	Gemini Taskは最大15タスク並行。ChatGPT Work / Coworkはサブタスク分割対応[40]
使用**AI**モデルの多様性	異種ベンダー混成（	自社系統のみ（Kimi K3	非公開[10]	自社系統のみ（Grok 4	自社モデル単独（

	Anthropic / OpenAI / Googleを1チーム化）[10]	Swarm）[10]		Heavy）[10]	OpenAI、Anthropic、Googleそれぞれの自社モデルのみ）[40]
エージェント間通信	直接通信・前提への疑問呈示・共有ファイル共同編集[4]	非公開（速度・網羅性重視）[10]	非公開（メインが結果を収集統合）[10]	エージェント間で作業を比較（発表主張ベース）[10]	主に親エージェントによる委任管理（Claude Codeには実験的なAgent Teamsあり）[40]
動作環境・制約	Web限定（クラウド実行のみ）[10]	Webおよびモバイルアプリ[10]	Web[10]	非公開[10]	Work / Coworkはクラウド＋デスクトップローカルファイル操作に対応。Gemini Taskは個人アカウント限定（法人Workspace対象外）[40]
料金目安（**2026年11月**）	年払い換算$167/月（月払い $200/月）＋クレジット制[10]	非公開[10]	非公開[10]	発表時$300/月[10]	Plus/Pro等は20/月〜、100〜$500/月[40]

Moonshotの「Kimi Agent Swarm」が最大300体のサブエージェントによって単一エージェント逐次実行比4.5倍の速度向上を謳うなど大量アイテムの並列処理に注力しているのに対し、Perplexityは並列上限を16体に絞る代わりに、異なるベンダーのモデル同士が議論・相互監査する深い協調を選択している[10]。また、OpenAIの「ChatGPT Work（旧ChatGPT Agent）」やAnthropicの「Claude Cowork」はデスクトップアプリを通じたローカルファイルの直接読み書きやブラウザ操作の手動引き継ぎ（CAPTCHA突破等）で強みを持つが、自社単一モデルファミリーに依存するためモデル固有のバイア

スは残存する[2]。Googleの「Gemini Task」は最大15件の同時タスク実行に対応するものの、2026年11月時点では個人用Googleアカウント限定であり企業・学校向けのGoogle Workspaceアカウントが対象外とされている[40]。結果として、法人利用可能なマネージド環境で複数ベンダーの最上位モデルを相互検証させられる点が、Perplexity Multiagentの明確な差別化要因となっている[2]。

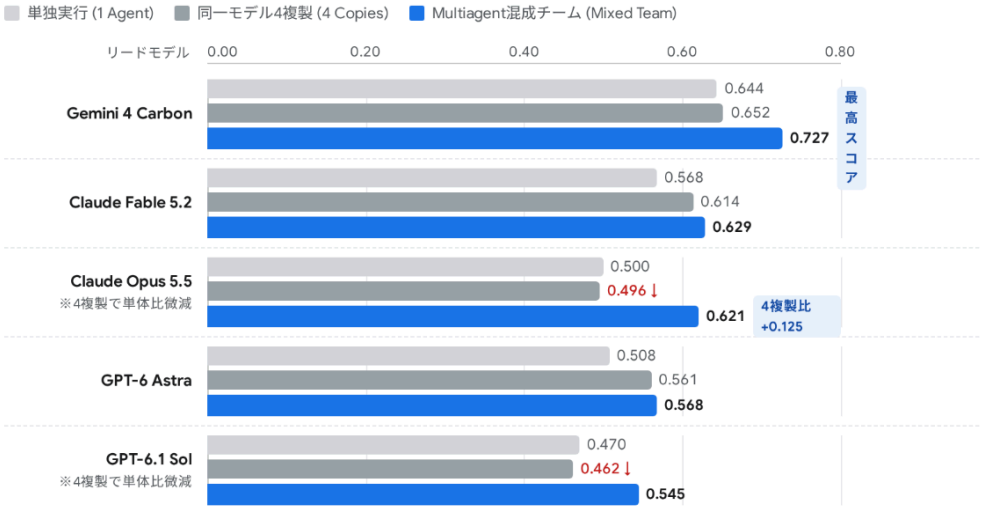
2. ベンチマーク性能検証とクレジット経済性の定量分析

2.1 単一モデルの複製（4コピー）に対する異種混成チームの優位性と未公開の限界

Perplexityは公式ブログ記事内にはベンチマーク数値を掲載しなかったが、11月17日の発表と同時に投稿した公式Xスレッドにおいて、「Terminal-Bench 4.1」および「WANDR」の2つのベンチマークによる自社測定チャートを公開している（CellCogや国内AI解説メディアがその詳細数値を抽出・分析している）[3]。この検証では、5種類のフロンティアモデルそれぞれについて、「①単独実行（1体）」「②同一モデルの複数複製（2体・4体）」「③当該モデルをリード役とする4体の異種モデル混成チーム（Multiagent）」のスコア・1実行あたりコスト・所要時間が比較された[5]。

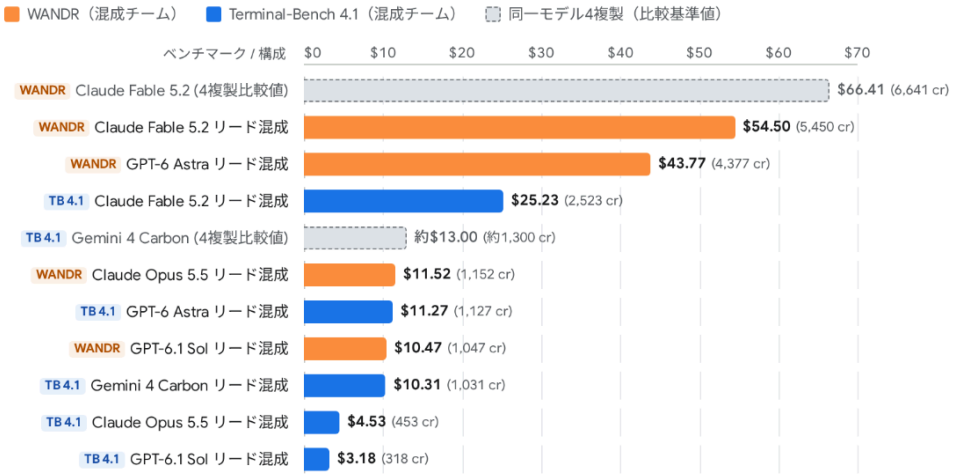
異種モデル混成チームは単一モデル4複製の精度を上回り、実行コストも抑制する

上段 **Terminal-Bench 4.1 スコア比較（単体 vs 同一モデル4複製 vs 異種モデル混成）**



下段 **1実行あたりの推論コスト比較（USD：WANDRおよびTerminal-Bench 4.1）**

すべて | WANDRのみ | Terminal-Bench 4.1のみ



予算換算 **月間付与クレジット枠に対するMultiagent実行可能回数の目安**

換算基準：100 クレジット ＝ $1.00

Consumer Max	10,000 cr/月 ($100相当)
Fable 5.2 WANDR級 ($54.50 / 5,450 cr)	**約1.8回/月**
Opus 5.5 WANDR級 ($11.52 / 1,152 cr)	**約8.7回/月**

※バーは1回あたりの月間枠消費率。初回限定ボーナス：35,000クレジット（約30日間有効）

Enterprise Max	15,000 cr/月 ($150相当)
Fable 5.2 WANDR級 ($54.50 / 5,450 cr)	**約2.8回/月**
Opus 5.5 WANDR級 ($11.52 / 1,152 cr)	**約13.0回/月**

※バーは1回あたりの月間枠消費率。初回限定ボーナス：40,000クレジット（約30日間有効）

Perplexity公表のベンチマーク結果とクレジット換算比較。上段のTerminal-Bench 4.1では、Claude Opus 5.5やGPT-6.1 Solを単独で4体複製すると精度が微減するのに対し、異種モデル混成チーム（Multiagent）では全5モデルで最高スコアを達成した（特にOpus 5.5リード時は4複製比**+0.125**上昇）。下段の1実行あたりコスト（100クレジット=1ドル換算）では、混成チームは同一モデル4複製より安価に済む一方、Claude Fable 5.2リードのWANDR級重厚タスクは1回**54.50ドル**（約5,450クレジット）に達し、月間付与枠の大半を消費する。

Data sources: CellCog, Perplexity Help Center (Credits), Perplexity Help Center (Enterprise Max)

Perplexity公表データが示す第一の重要な知見は、「同一モデルを単純に並列複製しても性能が向上するとは限らず、かえって低下する現象が起こり得る」という点である[5]。Terminal-Bench 4.1において、Claude Opus 5.5は単独実行時の0.500から同一モデル4複製時に0.496へと微減し、GPT-6.1 Solも単独0.470から4複製時に0.462へと低下している[5]。同一の重みと推論傾向を持つコピー同士では、誤った前提や盲点を相互に補強してしまうリスクがあるためと考えられる[2]。これに対し、異なるフロンティアモデルを組み合わせた混成チームでは、Claude Opus 5.5リード時に0.621（4複製比＋0.125）、Gemini 4 Carbonリード時に全体トップの0.727（同＋0.076）、GPT-6.1 Solリード時に0.545（同＋0.083）と全5モデルで最高スコアを達成した[5]。WANDRベンチマークでも同様に、Claude Fable 5.2リード混成チームが0.868（4複製比＋0.015）で最高スコアを記録したほか、Claude Opus 5.5リード（0.801、同＋0.064）やGPT-6.1 Solリード（0.809、同＋0.042）でも一貫して4複製を上回っている[5]。

第二の知見はコストと速度のバランスである。高単価な最上位モデル（Claude Fable 5.2やGemini 4 Carbon）を4体そのまま並べるよりも、サブエージェントに中・低単価モデルを織り交ぜる混成チームのほうが、より高い精度を出しながら実行コストを抑えられている（WANDRでのFable 5.2は4複製の66.41ドルに対し混成54.50ドル、Terminal-Bench 4.1でのGemini 4 Carbonは4複製の約13ドルに対し混成10.31ドル）[5]。また、WANDRにおける実行時間の中央値（1体単独と同一モデル4複製の比較チャート）では、Claude Fable 5.2が64.3分から48.2分へ、GPT-6 Astraが37.8分から19.0分へ、GPT-6.1 Solが33.3分から17.3分へと短縮された（単体で14.7分と最速だったClaude Opus 5.5のみ、4複製時に15.9分へ微増）[5]。

ただし、これらのデータには明確な留保事項がある。CellCog等の検証記事が指摘する通り、Perplexityは各混成チームにおける「リード役のモデル名」のみを公表し、具体的にどのサブモデルが何体組み合わされたのか、各スコアの試行回数やばらつき（分散）、WANDRベンチマークの評価内容の詳細、および混成チーム自体の実行時間データを非公開としている[5]。さらに、公表チャートは「4体チーム」での比較であり、最大16体まで拡張した際の精度推移や通信オーバーヘッドを示す第三者検証も現時点では存在しないため、導入組織は実業務サンプルでの事前検証を行う必要がある[3]。

2.2 料金プラン・クレジット消費構造と実務上のコスト管理

Perplexity Computerの料金体系は、月額サブスクリプション料金と、エージェントの実稼働量に応じて消費される「クレジット」の二階建てで構成されている[22]。公式ヘルプセンターによれば、クレジットの換算基準は2026年11月時点で「100クレジット＝1米ドル（1クレジット＝0.01ドル）」であり、簡単な事実確認で15〜70クレジット程度、複数ステップの調査案件では数百〜数千クレジット以上を消費する[19]。

プラン区分	月額料金（年払い換算 / 月払い）	月間付与クレジット（翌月繰越不可）	初回限定ボーナス（約**30**日で失効）	**Multiagent**利用可否	**ZDR**（ゼロデータ保持）・学習無効化保証	セッション添付ファイル上限・保持期間
Consum	17/月（年	月間定額	4,000クレ	不可[13]	なし（初期	保持期間

er Pro	200）/ $20/月[22]	付与なし（週次利用枠のみ）[19]	ジット[19]		設定で**AI**学習**ON**）[7]	**30**日間[7]
Consumer Max	167/月（2,000）/ $200/月[22]	**10,000**クレジット/月（$100相当）[19]	35,000クレジット[19]	利用可（Web版）[4]	なし（初期設定で**AI**学習**ON**・ZDR非対応）[7]	保持期間**30**日間（Computerは1ファイル最大200MB）[7]
Enterprise Pro	$34/席/月 / $40/席/月[42]	500クレジット/席/月[12]	8,000クレジット[19]	原則対象外（Max要件・管理者設定に依存）[13]	保証あり（学習無効・外部プロバイダZDR契約）[7]	週100ファイル迄・**7**日後自動削除（50席以上で期間変更可）[7]
Enterprise Max	271/席/月（3,250）/ $325/席/月[12]	**15,000**クレジット/席/月（$150相当）[12]	40,000クレジット[12]	利用可（段階展開中・Web版・ロール上限解放要）[13]	保証あり（学習無効・外部プロバイダZDR・監査ログ・SCIM）[7]	週**1,000**ファイル迄・**7**日後自動削除（**1**席から保持期間カスタム可）[7]

コスト管理上の最大の留意点は、Effort設定が「クレジット消費の上限（キャップ）」としては機能せず、またタスク実行前に消費クレジットを見積もる機能も現時点では備わっていないことである[3]。公表ベンチマークの実行コストを「100クレジット＝1ドル」で換算すると、Claude Fable 5.2リードによるWANDR級の重厚な調査（54.50ドル＝約5,450クレジット）を回した場合、Consumer Maxの月間付与枠（10,000クレジット）では月約1.8回、Enterprise Maxの月間付与枠（15,000クレジット）でも月約2.8回で基本枠を使い切る計算となる[5]。一方、Claude Opus 5.5やGemini 4 Carbonリードの中規模複雑度タスク（約10.31〜11.52ドル＝約1,031〜1,152クレジット）であればEnterprise Maxで月13〜14回程度、軽量な混成実行（約3.18〜4.53ドル＝約318〜453クレジット）であれば月33〜47回程度の実行が可能となる[20]。

組織運用においては、Enterprise管理画面の統制機能が重要な役割を果たす。管理者はユーザーやグループごとに名前付きの利用上限（Named Usage Limits）を設定して組織クレジットプールからの追加消費を制御できるほか、ロール単位で「選択可能な最大労力（Maximum Effort）」と「既定の労力（Default Effort）」を指定できる[13]。なお公式ヘルプの仕様上、Enterprise環境ではMultiagentは

まだすべての組織へ一律に有効化されているわけではなく、利用には管理者が当該ロールのMaximum EffortとしてMultiagentを明示的に引き上げる必要がある一方、誤用によるクレジット急減を防ぐため「Default EffortとしてMultiagentを設定することは不可」とする制限が設けられている[13]。

3. 知的財産業務への活用考察：高付加価値ユースケースの設計

3.1 なぜ知財業務に「異種モデル相互検証」が効くのか

PerplexityがMultiagentの想定用途として挙げた「年次報告書の財務諸表・注記・経営陣説明の個別読解と数値矛盾の検出」や「M&Aデータルームにおける財務記録・契約書・業務文書の並行照合」は、情報構造の観点から知的財産実務と極めて近い性質を持つ[1]。知財実務で扱うドキュメント群は、「特許請求の範囲（クレーム）」「発明の詳細な説明（実施例・変形例）」「図面および符号」「審査経過書類（拒絶理由通知書・意見書・手続補正書）」「複数の先行技術公報・非特許文献」「対象製品仕様書やライセンス契約書」が厳密な論理的・語彙的整合性をもって結びついているからである[16]。

従来の単一LLMによる長文処理では、どれほどコンテキストウィンドウが拡大しても、単一モデルが序盤で形成したクレーム解釈の思い込みに引きずられて後続の対比表を都合よく解釈してしまう確証バイアスや、文書中盤の段落・符号の不整合を見落とす事象が課題となってきた[2]。Multiagentでは、文書パートや検証視点ごとに別々のサブエージェントを配置し、長文構造化に強いClaude系モデルと低ハルシネーションの事実照合に強いGemini 4 Carbon等を相互チェックさせることで、「公報の段落番号や図面符号の齟齬」「構成要件の分節・対比漏れ」「法域間の主張矛盾」を最終回答の統合前に自律検出させるワークフローが設計できる[2]。

3.2 領域別・具体的活用シナリオ（5つの重点ワークフロー）

第4章で詳述するEnterprise Max等のセキュアな契約環境を前提とした場合、企業の知財部門および特許事務所において特に高い導入効果が見込まれる活用領域は以下の5つに整理できる。

第一の活用領域は、特許明細書ドラフトの多角的整合性監査（QA・記載要件チェック）である。出願前または納品前の明細書ドラフト一式に対し、Multiagent上で役割の異なる複数の監査エージェントを並行稼働させる。具体的には、①独立項・従属項の引用関係、択一的記載、先行詞（「前記」「当該」）の照応関係を精査する「クレーム構造監査役」、②各請求項の構成要件が発明の詳細な説明に漏れなく裏付けられているか（サポート要件・実施可能要件の観点）を確認する「明細書サポート検証役」、③本文中の部材名称・符号と図面中の符号の不一致・重複・未定義を洗い出す「図面・符号照合役」、④課題と発明の効果の対応関係を点検する「論理一貫性監査役」を分担させる。あるエージェントがクレーム文言の用語揺れを検出した際に即座に他のエージェントへ通知して実施例側の該当箇所を再点検させることで、弁理士による最終校閲前の記載不備検出精度を高めることが期待できる[1]。

第二の活用領域は、無効資料調査および**FTO**（侵害予防調査）における精密クレームチャート構築と進歩性論理の反証検証である。後述の通り母集団検索と一次スクリーニングは知財特化型ツールで実施したうえで、最有力候補として絞り込まれた10〜20件前後の公報PDF（外国語公報や学術論文を含む）と対象特許または製品仕様書をComputerのProjectに格納する[18]。ここで最大16体のエージェントを動員し、対象クレームの構成要件ごとの開示箇所（段落番号・図面）の抽出を分担させつつ、一部のエージェントに「相手方代理人・審判官（反証役）」の役割を与えて、「主引例に副引例を適用する動機付けが本当に存在するか」「組み合わせを妨げる阻害要因（Teaching Away）が

別段落に記載されていないか」を相互批判させる[2]。さらに実務上の使い分けとして、複数文献を横断するクレームチャートの共同編集には**Multiagent**を用い、最後に最も見解が割れやすい「特定のクレーム文言の充足性や均等論の成否」という単一の判断論点だけを切り出して**Model Council**にかけ、複数モデルの独立した判断の一致度を確認する二段階運用も有効である[4]。

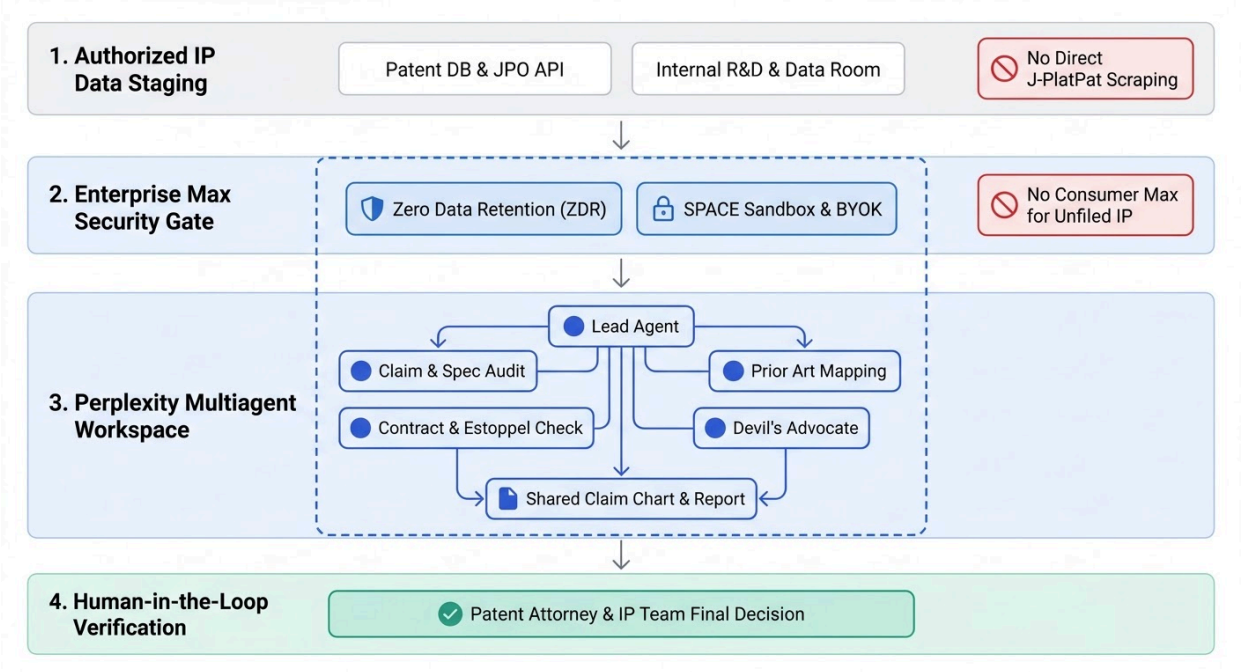
第三の活用領域は、グローバル中間処理（拒絶理由通知対応）と多法域の包袋禁反言リスク照合である。日・米・欧・中ファミリー出願している重要案件で拒絶理由通知を受けた際、一国の審査官に対する減縮補正や意見書での限定解釈の主張が、他国での権利範囲解釈や包袋禁反言（エストッペル）に波及するリスクがある。Multiagentを活用すれば、①今回の拒絶理由通知書と引用文献の解析役、②出願当初明細書からの新規事項追加にならない補正根拠の探索役、③対応する米国・欧州・中国ファミリーの過去のオフィスアクションおよび応答履歴の照合役、④競合製品（イ号製品）の仕様と補正案の権利範囲が乖離しないかを監視する事業保護監査役を同時稼働させ、共有ファイル上で「拒絶理由の解消と他法域リスクの抑制、および製品捕捉性を両立する補正案・反論構成の比較表」を作成させることができる[4]。

第四の活用領域は、M&A・事業提携における知財デューデリジェンス（データルーム横断照合）である。これはPerplexityが公式にMultiagentの代表的ユースケースとして掲げる「データルーム内の財務記録・契約書・業務文書の並行検証」を知財領域へそのまま展開するものであり、特許公報専用ツールではカバーしきれない複合領域である[1]。BoxやSharePointコネクタ等で接続されたデータルーム内の資料に対し、①対象企業の保有特許リスト・権利維持状況・係争資料の監査役、②共同開発契約書・ライセンス契約書におけるチェンジオブコントロール（支配権変更時の許諾終了）条項や非係争義務条項の抽出役、③職務発明の権利承継証憑の確認役、④事業計画・財務モデルへの影響評価役を並列稼働させる[4]。契約監査エージェントが主力製品に関わるライセンスの終了リスク条項を発見した際、即座に財務評価エージェントへ通知してリスク一覧表と買収価値評価の前提条件を連動更新させるといった横断実務に強みを発揮する[4]。

第五の活用領域は、IPランドスケープ（IPL）の高度化（特許×市場・財務×学術情報の統合分析）である。経営層や事業部門への提言を伴うIPLでは、特許件数推移だけでなく市場規模や投資動向との結合が不可欠となる[18]。PerplexityのPro・Max系プランは、インライン引用付きのWeb検索に加えてPitchBook、Statista、S&P Capital IQといったプレミアム金融・市場インテリジェンス情報源へのアクセスを備えている[6]。特許分析ツールからエクスポートした競合他社の特許クラスタCSVデータと、これら市場・投資データおよび各社の決算発表資料をMultiagent上で組み合わせ、複数の成長シナリオ別に技術ホワイトスペースや提携候補先を検証させ、経営報告用のスライドやレポートとして一気通貫で出力させる活用が見込まれる[4]。

4. 知財実務における法的・技術的リスクと特化型AIとのハイブリッド運用設計

前章で考察した活用シナリオを安全に実務適用するためには、知財法務固有の法的要件、特許データベースの利用規約、および特化型AIツールとの役割分担を明確に定義したガバナンス設計が不可欠となる[8]。



4.1 新規性喪失・秘密管理性・守秘義務とマルチサブプロセッサ問題

知財実務において最も警戒すべきリスクは、出願前の未公開発明や営業秘密の漏洩である[50]。2025年4月に日本弁理士会が公表した「弁理士業務AI利活用ガイドライン」では、秘密保持規約のない第三者のプラットフォームに未公開情報を入力した場合に「新規性を喪失」する可能性や、情報漏洩・守秘義務違反および営業秘密の秘密管理性に関わる懸念が提示されている[8]。実務指針の解説においても、①入力先が学習・保存・再利用の条件に照らして第三者にあたるかの確認、②依頼者の秘密情報を入力する際のAI学習有無にかかわらない依頼者の事前合意取得、③資格者による一次情報での出力検証と責任保持という3原則が重視されている[53]。

Perplexityの公式ヘルプおよび外部セキュリティ調査レポートに基づき各プランのデータ取扱仕様を精査すると、個人向けの「**Consumer Max**（月額**167～200**ドル）」に未公開発明や機密契約書を入力する運用は原則として避けるべきである[7]。個人向けプラン（Free・Pro・Max）はすべて初期設定でAIデータ保持（モデル学習利用）が有効（ON）となっており、有料のMaxへ移行しても自動ではオフにならない[7]。利用者が手動でオプトアウト設定やIncognitoモードを用いたとしても、セッション添付ファイルは30日間保持されるうえ、外部モデル提供事業者との間には「学習禁止」の取り決めはあるものの「ゼロデータ保持（ZDR）」保証は個人向けプランには提供されないからである[7]。また、Enterprise契約が終了して非Enterpriseプランへ移行した場合、アカウント設定が自動的に個人向けポリシー（AIデータ保持がデフォルトON）へ戻る挙動にも注意が必要である[7]。

したがって、機密性を伴う知財業務でMultiagentを活用するには、法人向けの「**Enterprise Max**」環境の採用が実務上の必須要件となる。Enterpriseプランではデータがモデル学習に一切使用されないだけでなく、OpenAIやAnthropic等の外部モデルプロバイダとの間で「学習禁止およびゼロデータ保持（ZDR）」契約が結ばれており、セッション添付ファイルは7日後に自動削除される[7]。特にEnterprise Maxを組織内で最低1席保有すれば、50席未満の小規模な知財部門や特許事務所であっても、組織全体のSCIM連携、監査ログ、およびセッション保持期間のカスタム設定が解放されるほか、基盤となるSPACEランタイムおよびEnterprise API展開では顧客管理鍵（BYOK）による暗号

化統制も用意されている[7]。
加えて、Multiagent特有の法務論点として「マルチサブプロセッサへの同時データ送信」を認識しておく必要がある。PerplexityのTrust Centerが公開するサブプロセッサー一覧には、Amazon Web Services（Amazon Bedrock含む）、Anthropic（Claudeモデル）、Google Cloud（Geminiモデル）など米国拠点の23事業者が記載されている[55]。Multiagentを実行すると、単一タスクの文脈がAnthropic・OpenAI・Google Cloudという複数の異なる外部事業者のモデルへ並行送信されるため、共同開発契約のNDAや事務所の受任契約で再委託先制限がある場合には、各モデルプロバイダに対するZDR適用範囲の契約確認と依頼者の事前同意取得を行うか、Enterprise管理機能で特定モデルを無効化（Effortモードは組織が無効化したモデルを自動回避し、利用可能な別モデルへフォールバックする仕様を持つ）する運用統制が求められる[12]。

4.2 特許庁DB（J-PlatPat・Espacenet）の自動収集禁止規約とデータ投入の鉄則

第二の落とし穴は、自律ブラウジング機能を持つComputerのエージェント群に、公的特許データベースのWeb画面を直接操作・収集させてしまう規約違反リスクである[15]。
日本のJ-PlatPatを運営するINPITは、一般利用の妨げを防ぐため、利用上の注意において「データの単純な収集を目的とした大量データのダウンロード」や「ロボットアクセス（プログラムによる定期的な自動データ収集）」を明確に禁止している[14]。同様に、欧州特許庁（EPO）のフェアユース規約も、Espacenetや欧州特許登録簿のWeb画面（GUI）を「人間のユーザー専用（for human users only）」と定めており、同一IPアドレスあたり毎分10アクションの閾値を設け、ロボットによる自動検索はアクセス拒否の対象としている（機械的な自動取得には登録制のOPS REST APIを使用する必要があり、無料枠は週4GB・最大通信量約1Mbit/秒に制限されている）[17]。
Multiagentの最大16体のエージェントに対して「J-PlatPatやEspacenetを検索して関連公報を収集せよ」と指示すれば、クラウドブラウザからの自動アクセスが集中し、利用規約抵触やIP遮断を招く恐れが高い[4]。ゆえに知財実務においては、公的特許DBのWeb画面に対する自律ブラウジングをプロンプトおよび社内規定で禁止し、特許庁の「特許情報取得API」、EPOの「OPS API」、Google Patents Public Data、Lens.org、あるいは商用特許データベースから適法に取得・出力したCSVデータや公報PDFをComputerのProjectにアップロードして分析させる手順を徹底すべきである[17]。

4.3 知財特化型AIエージェントとの機能分担（2段階ファネル戦略）

2026年現在、知財分野ではパテント・インテグレーション株式会社の「サマリア／サマリアAgent（2026年11月19日提供開始）」、PatSnapの「Eureka AI Agents」、Patentfield株式会社の「Patentfield AIR」、LexisNexisの「Protégé（2026年5月にPatentSight+へ搭載）」、Clarivateの「Derwent Patent Monitor / IPOne」など、知財特化型AIエージェントが急速に充実している[16]。とりわけサマリアAgentは、外部汎用生成AIとの接続（「サマリアMCP」等）において最大の導入障壁となっていた「社内セキュリティ・情報システム部門の承認ハードル」を画面内完結設計によって解消しつつ、検索式とヒット件数の可視化・転用、公報原図（図面）のインライン表示、根拠段落番号の添え書き、特許庁API連携による包袋取得、意見書案のWord出力・版管理までを知財実務フローに沿って統合している[16]。Perplexity Computer Multiagentはこれら知財特化型AIを置き換えるものではなく、明確な相互補完関係にある[16]。

評価軸	知財特化型**AI**エージェント（サマリア**Agent / PatSnap Eureka / Patentfield AIR**等）	**Perplexity Computer Multiagent**（**Enterprise Max**環境）
特許母集団の網羅性・検索式の再現性	高い。世界約170法域・約2億件の特許DB（PatSnap等）や特許分類コードに基づき、検証・転用可能な検索式と件数を明示[16]。	母集団検索には不向き。汎用Web検索と添付資料解析が中心であり、FI/Fターム/CPCを用いた網羅的母集団形成や検索式の厳密な再現性はない[15]。
大量公報の一括一次スクリーニング	適している。最大1万件の一括査読・評価出力（Patentfield AIR等）により調査時間を最大65～70%削減すると報告されている[18]。	不向き（クレジット過多）。数千件規模の生データをMultiagentで処理するとクレジット消費が過大となる[3]。
公報図面の視認・包袋**API**直結	専用機能あり。回答内での公報原図インライン表示や、特許庁API連携による審査経過書類（包袋）の直接取得に対応[16]。	PDF・画像ファイルとしての汎用読解は可能だが、特許図面専用ビューアや特許庁包袋APIの標準組み込みはない[16]。
異種モデル間の相互検証・反証推論	各ツールの採用する単一または固定パイプラインのモデルに依存[16]。	高い優位性。Claude・GPT・Geminiの異種モデル群が直接通信し、単一モデルの解釈バイアスや見落としを相互検証[2]。
異分野データ横断統合（契約・財務・市場）	主として特許公報・非特許文献・審査書類の範囲に特化[16]。	高い優位性。SharePoint/Box内の契約書、Excel財務モデル、PitchBook/S&P等の市場データを並行して結合・共同編集可能[4]。

以上の特性から導かれる実践的なアーキテクチャは、「第**1**段階（網羅的な検索式構築・母集団形成・数百～数千件の一次スクリーニング）を知財特化型**AI**が担い、第**2**段階（絞り込まれた重要公報**10**～**20**件の精密な相互検証、多法域包袋の矛盾点検、契約・財務・市場データとの統合成果物作成）を**Perplexity Multiagent**が担う」という**2**段階ファネル運用である。また将来的には、サマリアMCPやClarivate IPOne（MCP対応）のようにModel Context Protocolを介したシステム間連携も視野に入るが、PerplexityのAPI仕様ではZDR有効化組織においてprevious_response_idが使用でき

ない等の制約があるため、連携設計時には情報システム部門とAPI仕様の整合を確認する必要がある[16]。

さらに法的コンプライアンスの観点として、2026年3月31日に公表された日本の「AI事業者ガイドライン第1.2版」はAIエージェントを新たに対象化し、企業に対して「人間が最終判断できる仕組み（Human-in-the-Loop）」を求めている[49]。また、米国特許商標庁（USPTO）が2025年11月26日に公表したAI支援発明に関する改訂版発明者ガイドラインや欧州特許庁（EPO）等の実務が示す通り、AI自体は発明者として認められず、権利帰属や発明者適格性の問題を避けるためには人間による実質的な創作関与・編集が不可欠である[18]。Perplexity自身もMultiagentの出力は監査人や税理士などの専門家が確認することを前提としており、知財実務においても公報原文での段落・図面の裏取りと最終的な法的判断は弁理士および知財担当者が担う体制を徹底しなければならない[1]。

4.4 知財部門・特許事務所向け実践導入チェックリストとROI試算

最後に、日本の知財組織における費用対効果（ROI）を試算する。Enterprise Maxは年払い契約で1席あたり年額3,250ドル（月換算約271ドル、1ドル＝150円の参考レートで約4.1万円／月・年額約48.8万円）である[12]。仮に1席の月間付与枠（15,000クレジット＝150ドル相当）の中で、Claude Fable 5.2リードによる重厚なMultiagent検証（約54.50ドル＝約8,175円／回）を月1〜2回、Claude Opus 5.5やGemini 4 Carbonリードの中規模検証（約10.31〜11.52ドル＝約1,550〜1,730円／回）を月7〜8回組み合わせたとしても、追加クレジット課金なしで月間約10件の重要案件を処理できる計算となる[5]。外部調査機関や法律事務所へのFTO・無効資料調査やM&Aデューデリジェンスの委託費用、ならびに社内弁理士・知財部員の高度な照合工数と比較すれば、対象案件を適切に選別することで十分な投資回収が見込まれる[6]。安全な実務導入に向けた推奨ステップは以下の6項目に集約される。

1. 契約プランの厳格化と個人アカウント利用の遮断：未公開発明や契約書を扱う業務では個人向けConsumer Maxの使用を内規で禁止し、学習無効化・外部モデル事業者とのZDR契約・7日後自動削除・監査ログが担保されるEnterprise Max（最低1席以上を含むEnterprise環境）を導入する[7]。
2. マルチサブプロセッサ流通に関する契約・同意の整備：Multiagent実行時にAnthropic・OpenAI・Google Cloud等の複数サブプロセッサへデータが送信される点を踏まえ、NDAおよび受任契約の再委託条項を点検し、依頼者からの事前合意取得またはEnterprise管理画面での対象モデル制限（自動フォールバック活用）を設定する[13]。
3. 公的特許**DB**への直接自動アクセス禁止の徹底：J-PlatPatやEspacenet等のWeb画面に対するロボットアクセス規約違反を防ぐため、Computerに公的DBを直接検索させないプロンプト規約を定め、知財特化型AI（サマリアAgent、PatSnap、Patentfield等）や公式APIから適法に出力したファイルのみを投入する2段階ファネルを定着させる[14]。
4. ロール別上限と実行モード使い分け基準の運用：Enterprise管理画面でロールごとのMaximum Effortとクレジット利用上限を設定し、定型処理はLight・Standard、独立したセカンドオピニオン比較はModel Council、相互依存パートの並行照合・共同編集を要する重要案件のみMultiagentを選択する運用基準を明文化する[3]。
5. スモールスタート検証と同一スレッド反復によるクレジット節約：実行前のクレジット見積もり機能がない仕様を踏まえ、最初は2〜3件の少数文献でMultiagentの出力精度と実消費クレジットを測定してから対象を拡大し、修正指示は新規スレッドを立てず同一スレッド内でリード役に差分処理させる[3]。

6. **Human-in-the-Loop**（一次資料裏取りと人間による創作関与）の義務化：AI事業者ガイドライン第1.2版および弁理士業務AI利活用ガイドラインに則り、出力された公報番号・段落番号・図面符号・契約条項を必ず一次情報で人間が照合するとともに、明細書作成や補正案検討における人間の発明者・弁理士の実質的判断プロセスを記録・保全する[16]。

引用文献

1. Perplexity Computerに「Multiagent」登場 最大16のAIが別々の, https://www.techno-edge.net/article/2026/11/18/5758.html
2. Perplexity Computer Adds Multiagent: 16 AI Agents Verify - Emergent, https://emergent.sh/news/perplexity-computer-adds-multiagent-16-ai
3. Perplexity Multiagentとは？仕組み・性能・料金と注意点, https://dot-ai.myuuu.co.jp/times/articles/2214
4. Introducing Computer's Multiagent effort level - Perplexity, https://www.perplexity.ai/hub/blog/introducing-computer-multiagent
5. Perplexity Multiagent: Mixed-Model Teams, Benchmarked - CellCog, https://cellcog.ai/blog/perplexity-multiagent/
6. Perplexity Pricing: Plans for Individuals and Enterprise, https://www.perplexity.ai/hub/pricing
7. https://vdf.ai/blog/is-perplexity-safe-for-confidential-information/
8. 弁理士業務 AI 利活用ガイドライン, https://www.jpaa.or.jp/cms/wp-content/uploads/2025/04/AIservices-guideline.pdf
9. 生成AIの特許実務への利用可能性に関する検討, https://jpaa-patent.info/patent/viewPdf/4854
10. Perplexity Computer Adds Multiagent: Up to 16 AI Agents That Cross, https://www.marktechpost.com/2026/11/17/perplexity-computer-multiagent-effort-level/
11. Perplexity Portable Computer: Local-First Agents, Explained - CellCog, https://cellcog.ai/blog/perplexity-portable-computer/
12. What is Enterprise Max? - Perplexity Help Center, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/12310544-what-is-enterprise-max
13. Effort mode in Perplexity Computer - Perplexity Help Center, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/20260917-effort-mode-in-perplexity-computer
14. [INPIT]利用上のご案内 | 独立行政法人 工業所有権情報・研修館, https://www.inpit.go.jp/j-platpat_info/guide/j-platpat_notice.html
15. 特許調査のAI活用｜出願前の発明を守る使い方と手順, https://coplus-one.jp/tokkyo-chosa-ai/
16. 生成AIで特許調査・拒絶理由通知への対応を効率化。検索式・件数, https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000033.000086119.html
17. Fair use charter for the EPO's online patent information products, https://www.epo.org/en/service-support/ordering/fair-use
18. https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/c9e80df2af33b30a9690.pdf
19. How credits work on Perplexity - Perplexity Help Center, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/13838041-how-credits-work-on-pe

rplexity
20. unknown_url
21. Perplexity Computer: Guide to Features and Mac Setup (2026), https://www.layer3labs.io/guides/perplexity-computer-explained
22. Perplexity Computer Review: Hands-On Parallel AI Test - DataCamp, https://www.datacamp.com/tutorial/perplexity-computer
23. Computer for Pro subscribers, Computer for Slack - Perplexity, https://www.perplexity.ai/changelog/what-we-shipped---march-13-2026
24. Perplexity Computer vs Manus AI: which agent is worth it? - Sliq, https://getsliq.com/blog/perplexity-computer-vs-manus-ai
25. 2026年版Perplexity Cometの料金 - eesel AI, https://www.eesel.ai/ja/blog/perplexity-comet-ryokin
26. Enterprise file limits - Perplexity Help Center, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/12009761-enterprise-file-limits
27. Making SPACE: Secure and efficient runtimes for long-running agents, https://www.perplexity.ai/hub/blog/making-space-secure-and-efficient-runtimes-for-long-running-agents
28. Perplexity Open-Sources SPACE MicroVM Sandbox for AI Agents, https://emergent.sh/news/perplexity-open-sources-space-microvm-sandbox
29. Perplexity - PRIMO.ai, https://primo.ai/wiki/Perplexity
30. Perplexity Computer Launches Natively on macOS - AICoder, https://aicoder.com/news/news-1792512339690-uww1o
31. GPT-6.2 Astra and Sol Complete Guide: Model Specs, API Pricing, https://journal.qualiteg.com/gpt-6-2-astra-sol-guide/
32. Claude Fable 5.2: New Features, Pricing and API - OmniaKey, https://omniakey.com/blog/claude-fable-5-2
33. Claude Opus 5.5 (medium) - 知能、性能、料金の分析, https://artificialanalysis.ai/ja/models/claude-opus-5-5-medium
34. Claude Opus 5.5 対 Gemini 4 Carbon：12%の上限 - OrcaRouter, https://www.orcarouter.ai/ja/blog/claude-opus-5-5-vs-gemini-4-carbon
35. Qualiteg - Claude Fable 5.2 Complete Guide: Model Specifications, https://journal.qualiteg.com/claude-fable-5-2-claude-code-guide/
36. Claude Opus 5.5 vs Gemini 4 Carbon - AI Garage, https://ai-garage.jp/vs/claude-vs-gemini/
37. 【Googleが今熱い】「Gemini 4 Neon」が登場！フロンティア級の, https://note.com/humble_bobcat51/n/n336d40d04daa
38. Claude Fable 5.2 vs GPT 6.1 Sol, https://vividllm.chat/models/claude-fable-5.2-vs-gpt-6.1-sol
39. AIエージェントの最新動向2026｜元年はいつから？2025年からの年表, https://re-study.jp/ai-agent-2025-2026/
40. https://truespeak.io/blog/chatgpt-agent-vs-claude-cowork-vs-gemini-2026
41. 8-21. 番外編1：世界のAI Agent企業を読む｜香川友志 - note, https://note.com/kagawatomo/n/n2c0e35b1696f
42. Perplexity Pricing 2026: Free, Pro, Max and Enterprise | No Code MBA, https://www.nocode.mba/articles/perplexity-pricing

43. Perplexity Max, https://www.perplexity.ai/max
44. How credits work for Enterprise organizations — admin guide, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/13901296-how-credits-work-for-enterprise-organizations-admin-guide
45. 発明提案書から特許明細書まで比較すべき5つのポイント - AI - note, https://note.com/ose_yosshy/n/nbeb9aa4d687e
46. Using the Box connector - Perplexity Help Center, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/13130932-using-the-box-connector
47. Microsoft 365 connector (SharePoint and OneDrive) - Perplexity, https://www.perplexity.ai/help-center/en/articles/12569435-microsoft-365-connector-sharepoint-and-onedrive
48. B260519:〈生成AI時代の知財実務を再設計〉特許調査・明細書・IP, https://www.science-t.com/seminar/B260519.html
49. AI事業者ガイドライン2026対応｜企業のガバナンス体制チェック, https://gxo.co.jp/column/ai-governance-guidelines-japan-2026-enterprise-compliance
50. 生成AIと知財実務, https://assets.super.so/a63cd66e-6325-4a38-86a0-7eb8fdfb1136/files/3a66a772-9893-4c9b-a7b9-025fd986640c/p52-57-2026-ai-_-_.pdf
51. ガバメントAI国産LLM公募結果が企業の知的財産活動 における生成, https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/d3130dc08e13f4ecd9b8.pdf
52. 【最新アップデート版】生成AIへの個人情報・営業秘密・機密情報の, https://businessandlaw.jp/articles/a20260409-1/
53. 士業のAI活用｜守秘義務の条文と、事務所で決める環境・ルール, https://coplus-one.jp/shigyo-ai/
54. Perplexity vs Claude: Pricing, Search & Security 2026 - NeuralTrust AI, https://neuraltrust.ai/blog/perplexity-vs-claude-benchmark
55. Subprocessors - Perplexity Trust Center, https://trust.perplexity.ai/subprocessors
56. DotsとサマリアMCPで、月次の特許ウォッチングを試してみた - note, https://note.com/ip_design/n/n64298cbee466
57. 【特許分析】Pythonでお金を掛けずにパテントマップを作ってみた, https://qiita.com/kon2/items/5966dea076c349aecbaf
58. Are there any restrictions on using OPS? | epo.org, https://www.epo.org/en/service-support/faq/searching-patents/open-patent-services/general-information/are-there-any
59. 特許情報取得 API 利用の手引き, https://ip-data.jpo.go.jp/files/%E7%89%B9%E8%A8%B1%E6%83%85%E5%A0%B1%E5%8F%96%E5%BE%97API%E3%81%AE%E5%88%A9%E7%94%A8%E3%81%AE%E6%89%8B%E5%BC%95%E3%81%8Dv1.1.pdf
60. Claude Code skill — patent search for IP departments ... - GitHub, https://github.com/jw0831/patent-search
61. サマリア「明細書作成支援機能」2026年3月リリース 調査レポート, https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/610f8e4a2d25a0c07bac.pdf
62. IPRally 知財 AI プラットフォーム 詳細調 査レポート,

https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/7182fba2391d52300cf1.pdf
63. Jobs and Employment at PatSnap - Simplify, https://simplify.jobs/c/PatSnap
64. Patsnap | 知財・R&D・創薬向けAIエージェント, https://www.patsnap.jp/
65. MCP - Perplexity API, https://docs.perplexity.ai/docs/agent-api/tools/mcp
66. AIが支えるIPライフサイクル全体の自動化と法的留意点, https://patent-revenue.iprich.jp/%E5%B0%82%E9%96%80%E5%AE%B6%E5%90%91%E3%81%91/5255/